

子ども時代の読書

- 質問紙調査およびフォーカス・グループ・インタビューからの分析
汐崎順子(慶應義塾大学大学院) [shio-js@slis.keio.ac.jp]

1. 研究の目的

現在わが国では、誰もが文字を理解し、本を読む能力を身につける教育体制が整っている。生活の中で本は当たり前の存在であり、いつでもたやすく入手できる。しかし「本が好き」という意識を全ての人が持つわけではない。好み表れる時期や原因にも個人差がある。

読書は、行うことが望ましいとされる社会的文化的な行為であり、生活に不可欠なものではない。個人的な行為であるため、各自が「本が好きになった」と考える基準も異なる。さらに、内的外的、様々な要因が複数影響すると考えられる。また、一度目覚めた読書への意欲は、その後も継続して存在するのだろうか。

本研究では、子ども時代(ここでは幼児～小学生とする)を、人が読書への興味を持つ出発点として注目し、いつ・何をきっかけに各自に「本が好き」という意識が生まれ、それがどう発展したのかについて、量的質的、両面からの検証を行うことを目的とする。

2. 研究の背景

読書心理学の視点から子どもの読書能力の発達区分を試みた阪本一郎¹⁾や、発達心理学の枠組みの中で、読書の発達過程を探っている秋田喜代美²⁾の研究など、子ども時代の読書については、識字能力、読書能力の発達とともに捉えられることが多い。

秋田は2001年に、読書に対する親、および家庭環境の役割に注目して質問紙調査を実施し、小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響を示した³⁾。藤井いづみも2000年に、親子への質問紙調査から、子どもの読書に大人が与える影響を考察した⁴⁾。秋田と藤井に共通するのは、調査の設計段階で、すでに子ども時代の読書に関わる大人＝親と、環境＝家庭の存在が重要であることを仮定し、分析をしていることにある³⁾⁴⁾。

さらに現在は、子どもの読書の実態を知るためのさまざまな調査が存在する。

毎日新聞社が、全国SLAと合同で1954年より毎年行っている「学校読書調査」では、1万人以上の子ども(小4～高校生)の「今の読

書」の実情を知ることができる⁵⁾。

文部科学省が2004年度に行った「親と子の読書活動に関する調査」は、親子への質問紙調査から、幼児期の読書体験や読書環境、親の読書活動が子どもの読書に及ぼす影響を把握しようとしたものである⁶⁾。

これらの調査は、子どもの読書の現状を伝えてくれる。しかし本来的には実態調査であり、「今・どのような環境で」読書をしているかを知るには有効であるが、「いつから・どうして」読書が好きになったのかを示すものではない。

すでに述べたように、秋田と藤井は、子どもの読書行動に与える親の影響の大きさを重視している³⁾⁴⁾。知識や経験が少なく、生活の範囲が限定される子どもにとって、まず家庭環境、親の影響が大きいことは当然であろう。しかし子どもが成長し、徐々に社会的活動を広げていく中、その社会の中で彼らに読書の機会を与える場所や人についてはどうだろうか。

学校図書館(室)・地域の公立図書館等の環境的要素、教師・友人・司書等、家族以外の人的要素の影響も、子どもの読書の入口と、その後の読書意欲を強化するものと捉え、その影響を総合的に判断していく必要がある。

3. 研究方法

本研究では、量的質的両面からの検証を行うために、質問紙調査およびフォーカス・グループ・インタビュー(以下 FGI と略す)を調査の手法として採用した。

3.1 質問紙調査

【対象者、背景】

質問紙調査の対象は、大学生とした。既存研究のように子どもの読書の実態から検証を行うのではなく、その時代を経た大人が、自身の「子ども時代の読書」を客観的に振り返った際に引き出される情報から、読書へのきっかけや強化の要素を見出すためである。

今回対象とした者のほとんどが'80年代半ば生れであり、'90年代に小学生であった世代である。この時期は、学校図書館整備の機運の高まり、公立図書館の施設数と児童室設置率の安定した増加が見られるなど、学校や

地域において子どもがある一定水準の読書経験を享受できる環境が整備された時代であった,見なすことができる。

質問は, 子ども時代の読書(好き・嫌い), 「好きになった」と考える時期とその理由, 読書嗜好, 各成長過程における各種環境等, 学校図書館(室)と公立図書館の利用の有無と, その評価, を中心に, 現在の読書に関する内容を付加した構成とした。

【調査の実施, 結果の分析】

調査は2006年7月に6大学の授業で実施し, 回収数は517人であった。うち回答不備, 留学生, 生年の条件('80年生れ以降に限定)などから13人を削除し, 504人を分析の対象とした(男213人, 女283人, 不明8人)。対象とした'80~'89年生れのうち, '84~'86年生れは428人(84.9%)であった。結果は単純集計とクロス集計で整理・分析し, 子ども時代の読書に関する特徴的な要素を見出した。

3.2 フォーカス・グループ・インタビュー

【対象者】

量的調査である質問紙調査と併せて質的調査として FGI を実施した。本研究では, この FGI を質問紙調査の方向に何らかの示唆を与え, 結果に補足や異なる視点からの考察を与えるものとして位置づけた。

FGI では質問紙調査の対象と同世代(大学卒2年程度)で, 子ども時代に「本が好き」であり, 「学校や公立図書館の利用者」だった男女各5人合計10人を集め, 男女別の各グループにインタビューを実施した。

【FGI の実施, 結果の分析】

女性グループの FGI は, 全ての調査に先立てて実施した(6月末に実施)。インタビューから得た情報を質問紙調査の設問に反映させる目的もあったためである。男性グループの FGI は7月末日に行った。

どちらも予め, 「子ども時代の読書」につ

いて自身の経験を語ってもらうという説明をした後は, 自由に討議を行ってもらい, お互いの会話の中から話題を発展させていく手法をとった(所要時間は約2時間)。FGI の実施後, 音声と録画による記録をもとに, 各参加者の発言の中から重要と思われる要素の抽出と分析を行った。

4. 結果と考察

今回の調査では, 以下の点が子ども時代の読書の特徴として明らかとなった。

【子ども時代の読書・現在の読書】

子ども時代(~小学生)に「本を読むのが好き」であったと答えたのは「好き」, 「やや好き」を合わせると344人(68.3%)であった。「現在本が好きか」も併せて尋ねたが, こちらの結果は443人(87.9%)であった。子ども時代も過半数は本が好きだったと認識しているが, 本人が「本が好き」と意識したのは, 子ども時代以降(中学~)であった者も100人近くいることが分かった。

さらにこの内容を詳細にみると, ごく少数ではあるが「好き」から「嫌い」に移行した者もあった(全体で11人)。続けて子ども時代に本が好きだった者344人に「いつ好きになったかを尋ねると「小学校に入る前」と答えた者が169人(49.1%)であった。

子ども時代に本が好きだったかどうかと, さらに細かく「本が好きになった」時期をみると, 男女差が大きかった。まず前者に関しては, 「好き」と答えたのは女性221人(78.1%), 男性116人(54.5%)であった。後者の結果は, 女性123人(55.7%)が「小学校前」と答えているのに対し, 男性は42人(36.2%)であった(第1表)。

FGI の会話からも, 就学前からの読書経験を語る女性が多いのに対し, 男性は「本が好きになった時期」と発言したのは小学校以降が多かった。しかし会話が進む中, 男性も就学前の読

み聞かせや絵本の体験を鮮明に思い出して語る様子が多く見られた。質問紙調査と FGI の初期の場面では見ら

第1表: いつ本が好きになったのか?

	総数/好き合計/%			小学前		1~2年		3~4年		5~6年		不明	
	男	女	不明	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
男	213	116	54.5%	42	36.2%	25	21.6%	40	34.5%	9	7.8%	0	0.0%
女	283	221	78.1%	123	55.7%	39	17.6%	35	15.8%	23	10.4%	1	0.5%
不明	8	7	87.5%	4	57.1%	1	14.3%	2	28.6%	0	0.0%	0	0.0%
合計	504	344	68.3%	169	49.1%	65	18.9%	77	22.4%	32	9.3%	1	0.3%

*注) 各性別の欄の%は, それぞれの総数に対する比率

れなかった男性の潜在的な意識が、FGI を進めていく中で、判明したといえる。「本が好きになる」という状態の認識自体に、男女差があるとも考えられる。

【本が好きになるきっかけと嗜好】

本が好きになるきっかけ(1つだけ選択)は、「親」が170人(51.2%)と一番多かった。これは先の本が好きになる時期で「就学前」が最も多かった結果からも当然のことといえる。これに次いで「学校図書館(室)」(39人:11.8%)、「友達」(21人:6.3%)があげられたが、2位以降との格差は大きい。

本が好きだった理由(3つまで選択)については、男女ともに「内容が面白かったから」、「色々なことを知ることができたから」が多かった。しかしこれ以外には男女間で相違が見られた(第2表)。

女性のFGIでは、きっかけとして「一人であるのが好きだった」、「運動が苦手だった」というやや消極的な発言があり、これを設問に加えたところ、男女ともにこの項目を選択する者が見られた。しかしFGIの男女双方のグループは、この要素を否定的には捉えていない。運動や人とのつきあいが苦手だから読書に逃げるのではなく、読書により価値観を見出すというニュアンスでの発言であった。

嗜好については、男女差がはっきり見られた。男性女性ともに一番多くあげられたのは物語であったが、双方の比率はかなり異なる。絵本に関しては男女の差が大きく示された。男性では伝記や知識の本、雑誌などを好む者が多かった(第3表)。しかし

質問紙調査で実際に「好きだった本」として記述してもらった中に(3冊まで自由記述)、男性で絵本や幼年童話の書名をあげた者も見られた。

【読書環境】

家庭では、家に本がたくさんあること、母親が本好きであることが大きな要因であることが分かった。父親や兄弟の影響は数字上はむしろ逆効果のように見受けられる。読み聞かせの実践の有無の影響に関しては、有意な差が見られなかった(第4表)。幼稚園や保育園については、「よく覚えていない」と回答した者が最も多かった(242人)。

「学校図書館が小学校にあった」と答えた者は448人(88.9%)、「地域に公立図書館があった」と答えた者は317人(62.9%)で、特に学校図書館普及の様子が明らかとなった。

【学校図書館、公立図書館の影響】

学校図書館と公立図書館については、さらに細かい設問で、各図書館の施設の状況と各自の利用状況をそれぞれ10項目尋ねた(該当するもの全てを選択)。回答された項目数の平均は学校図書館が2.85、公立図書館が4.13であった。さらに5段階で図書館の評価を求めたところ、学校図書館の平均値は3.45、公立図書館は3.89であった。これにより、普及度は学校図書館が格段に高いが、満足度、施設やサービスへの認識は公立図書館の方が高いことが分かった。

学校図書館と公立図書館の存在が、本が好きになる要素になるかについては明確な結果は見出せなかったが、双方を「よく利用した」と回答した者の子ども時代の好みを

第2表:理由(なぜ好きだったのか)

	内容が面白かったから	色々な事を知ることができたから	ためになったから	達成感があったから	他人と話題を共有できたから	親や先生がほめてくれたから	一人であるのが好きだったから	運動が苦手だったから	特に思い当たらない	その他											
男	116	105	90.5%	68	58.6%	29	25.0%	14	12.1%	15	12.9%	3	2.6%	9	7.8%	17	14.7%	6	5.2%	5	4.3%
女	221	205	92.8%	115	52.0%	16	7.2%	53	24.0%	21	9.5%	17	7.7%	25	11.3%	22	10.0%	10	4.5%	10	4.5%
不明	7	5	71.4%	3	42.9%	1	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	14.3%	0	0.0%
合計	344	315	91.6%	186	54.1%	46	13.4%	67	19.5%	36	10.5%	20	5.8%	48	14.0%	39	11.3%	17	4.9%	15	4.4%

第3表:嗜好(何が好きだったのか)

	絵本	物語	推理	昔話	伝記	知識	雑誌	漫画	他										
男	116	31	26.7%	81	69.8%	33	28.4%	17	14.7%	32	27.6%	27	23.3%	21	18.1%	56	48.3%	4	3.4%
女	221	139	62.9%	189	85.5%	62	28.1%	54	24.4%	45	20.4%	22	10.0%	13	5.9%	87	39.4%	2	0.9%
不明	7	2	28.6%	4	57.1%	0	0.0%	1	14.3%	1	14.3%	3	42.9%	2	28.6%	2	28.6%	0	0.0%
合計	344	172	50.0%	274	79.7%	95	27.6%	72	20.9%	78	22.7%	52	15.1%	36	10.5%	145	42.2%	6	1.7%

第4表：読書と読書環境(家庭)

		家に本がたくさんあった		母が本好きだった		父が本好きだった		兄弟が本好きだった		読みかせをしてもらった		家族に本を薦めてもらった	
好きだった	344	203	59.0%	159	46.2%	96	27.9%	61	17.7%	138	40.1%	75	21.8%
嫌いだった	108	36	33.3%	42	38.9%	33	30.6%	21	19.4%	44	40.7%	17	15.7%
好きになったのは 中学以降	52	21	40.4%	14	26.9%	11	21.2%	5	9.6%	10	19.2%	2	3.8%
計	504	260	51.6%	215	42.7%	140	27.8%	87	17.3%	192	38.1%	94	18.7%

みると、学校図書館を積極的に利用した204人のうち190人(93.1%)、公立図書館では169人のうち143人(84.6%)が、子どもの時に「本が好きだった」、「好きだった」と回答した者であった。

【読書経験と資格取得の意欲】

今回は、司書および司書教諭科目の授業での調査が多かったため、資格の取得を希望する者の割合が高かった(381人:75.6%)。子ども時代の読書経験が、資格取得への興味と意欲に影響を与えているかどうかの設問に対しては「とても思う」、「やや思う」と回答した者は266人(69.8%)であった。子ども時代の読書経験が、職業への意欲となって表れていることが明らかとなった。

5. まとめ

本研究では、子ども時代をすでに経たる者を対象とし、それぞれの意識の中にある読書経験の情報から「子ども時代の読書」についての分析を試みた。既存研究で述べられているように、就学前の読書体験と家庭と親の影響は大きな要因であることが確認された。しかしそれ以外に、本が好きになる時期や原因のバリエーションも見られ、読書に対する男女の意識の差が明らかとなった。同時に「本が好き」という認識の差、個々人の心の中にある尺度の違いにもこの男女差があることがFGIから分かった。

この種の調査研究では、質問紙調査で示される量的な数値だけから判断するのではなく、FGIを用いた質的な調査も併せて行い、複合的に考察することの有効性が確認できた。

今回は、学校図書館と公立図書館の影響を明らかにすることも併せて試みた。質問紙調査では、子どもの読書環境がかなり整備され、各図書館を利用できる(しやすい)状況であったことが確認できた。環境が整

っていれば本が好きか、という側面から見た場合は、明らかな結果は見出せなかったが、本が好きな子どもの学校図書館と公立図書館の利用、という側面から見ると、彼らが積極的な利用者であったことが示された。

学校図書館の普及の様子が明らかとなったが、満足度、施設やサービスの認識は公立図書館よりも低く、内実が十分でないことが推察された。FGIでは私立の小学校に通った女性が多く、私立と公立の学校図書館では整備状況が格段に違うという発言があったため、双方の図書館利用者の差異が表れることを予想したが、結果として私立の小学校に通っていた者がごく少数であり(6人)、期待したデータが得られなかった。

今後は、今回の調査結果をさらに詳細に分析すること、司書・司書教諭科目を履修しない大学生の標本数を増やすこと、FGIのバリエーションを広げること(子ども時代に本を読むのが好きでなかったグループ、男女一緒のグループ等)、などが考えられる。子ども時代の読書のより多様なパターン、全体に共通するパターンを見出し、子ども時代に本が好きになる過程をさらに明らかにすることがこれからの課題である。

【注・引用文献】

- 1) 阪本一郎．現代読書の心理学．東京，金子書房，1971，294p．
- 2) 秋田喜代美．読書の発達過程 読書に関わる認知的要因・社会要因の心理学的検討．東京，風間書房，1997，262p．
- 3) 秋田喜代美．“小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響”．発達心理学．Vol.3，No.2，2001，p.90-98．
- 4) 藤井いづみ．“子どもの読書に関する実態調査 子どもと親へのアンケートと読み聞かせの実践から”．白百合児童文化．No11，2001，p.42-48．
- 5) 読書世論調査 2006年版．東京，毎日新聞社，2006，107p．
- 6) 文部科学省．“親と子の読書活動等に関する調査”．【2006-10-9】，
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05111601.htm>